

遠壽院荒行僧 集団脱走事件 〔上〕

昭和22年12月29日 初行54名が法華経寺へ

週刊仏教タイムス
令和3(2021)年10月21日掲載

古い話である。1947年というから74年も前のことだ。だが、問題意識をもって事態を検証し現在の状況を凝視すれば、今日的な問題の解明と教訓が得られよう。

荒行で知られる日蓮宗の祈禱根本道場である遠壽院(戸田日晨伝師、千葉県市川市)から『正中山遠壽院加行門人帳』が6月に公刊された。元禄5年(1692)〜昭和22年(1947)の256年間にわたる3966名の加行僧の起証文、誓約書、名簿類を、戸田氏が監修、都守基一氏(常田寺日蓮仏教研究所)が翻刻、解題を付したもので、A4判約500頁の大冊である。学術的価値の高いことはいまでもないが、原慎定氏(立正大学仏教学部教授)の「刊行に寄せて」の文末に、「(戸田伝師が)相当の覚悟をもって」本書を刊行したという、気になる一文がある。「覚悟」とは取りようによっては

穏やかではない。

奇妙に感じたのは、時代区分としてさして意味がない1947年が翻刻の最終なのである。ところが該当年の頁を開くと驚くべき事実が読み取れた。初行僧58名(当初62名)のうち4名しか行を成満していないのだ。残りの54名はどうなったのか。解題には、入行60日目の12月29日、彼らは近接の法華経寺へ集団脱走したとある。その法華経寺は前年に日蓮宗を離脱し「中山妙宗」を名乗るといふ「不穏な兆候」があった。次いで、1949年には宗門自身が新たに身延山に「日蓮宗荒行堂」を開設し、遠壽院も行堂を再開したと、解題は淡々と続けている。

現在、荒行は遠壽院荒行堂で行われると同時に、1972年に日蓮宗に復帰した法華経寺でも開堂される(昨年、今年はコロナ禍のため法華経寺は休堂。遠壽院は医学的対策を施し開堂)。法華経寺のほうは宗門直轄であり、入行僧も遠壽院よりはるかに多い。1947年の集団脱走事件は、じつは宗門行堂新設の契機となったのだった。その真相が、本書の刊行によって歴史的安全性もふくめ、ようやく明らかにさうとしている。遠壽院側の解説を踏まえて報告する。



根本道場であることを示す
遠壽院の石柱
(藤田庄市撮影)